「東南アジア大陸部における民族間関係と『地域』の生成」について

はじめに

本研究は、一公募班として参画する機会を得る前に、現在の研究代表者および分担者を含む八名が発表報告を行った京都大学東南アジア研究センターでの特別研究会を嚆矢としている（１９９５年１月６－７日「東南アジア大陸部における民族間関係のなかの『民族』と『社会』の動態」）。この単発の研究会は、最近の十年ほどの間で西南中国を含む東南アジア大陸部で現地調査を実施してきたほぼ同世代の研究者が、それぞれのフィールドから民族間関係について成果報告し、広く「民族」とその記述にまつわる諸問題をあぶりだすことをねらっていたが、各人の経験的調査で得られた事象を、マニュアル化した人類学的思考とテクスト編制の内に封じこめる前に、それが「いかにして」あらわれているのかを検討、討論する場となった。これをそのまま継承する形で本研究が発足し、内外の数多くの研究協力者を得て研究会を重ねるに至っている（付表参照）。そして、本成果報告書に寄稿することになった者は、おおむね以下に述べるような研究班設立の趣旨と目的を確認しあいながら個々の研究作業を継続してきた。

1

ある異文化社会ないし異民族社会を、統合された自立的なものとして調査し、記述しえた時代の終焉が叫ばれて久しい。民族の形成、衰亡は閉じられた社会系のなかで展開されるものではない。研究者が調査・記述の対象としてきたそれぞれの民族社会は、常に隣接する異民族・異文化、有力支配民族による政体や国家編制過程との歴史的・政治的・文化的諸関係のなかで存在してきている。民族とは文化、歴史的時間のなかで何らかの持続性を示す実在というものではなく、むしろそうしたさまざまな次元の関係のなかでうみだされ、位階づけられ、変化してきたものである。したがって、ある民族や社会は、そうした関係のなかで捉えられなくてはならない。グローバルな社会変化、およびそれと相反するかのような民族や地域社会の際だっ

た特徴が顕在化する今日、このことは、ますます自明のものとなりつつある。

民族は、まず他者のまなざしのなかで構築される。他民族との関係は、その名称もふくめてそのアイデンティティ形成と経過に大きな要因をおよぼす。また、主観的な帰属意識もまた、外部からの政治行政や市場経済の空間において、他者との相互依存関係において変化する。他者のまなざしを利用するかたちでも展開する。民族のこうした生成文法はすでに多く論じられてきた［Leach 1954, Moerman 1965, Kunstadter 1967:14, 大林 1984: 7-8］。今日の市場経済体制のもと、民族が国家の観光資源となるだけではなく、国家の伝統を表示するものになりさえする。民族はすぐれて自己の政治的手段のイメージともなる。したがって、ひとつの民族指標を固定して考察することは、これを物象化し実態視することである。民族は、内外の要因によって与えられ、受容され、放棄され、選びとられるものといってよいだろう。「民族」は、内外の要因によって創出される現象である。しかも権力作用による産物である。

他方、研究者と研究対象の関係もまた大きく変わりつつある。人類学的調査の主な研究対象であった民族の出身者は、彼が帰属する、あるいは彼を包摂する環境に応じて、それぞれの戦略にもとづいて自民族文化および隣接する異文化について語り始めている。多くが先進国の出身者である調査者が、従来その具体の世界に沈潜しつつも、恣意的なレファレンスとしてきた民族という概念は、いまや一層硬直化したものとして現れている。さらに、こうした動きは、民族や地域についての画一的な従来の認識が、大国と小国、支配民族や少数民族、記述する側とされる側との関係において生じた表象の力学によるものであったことをも明らかにしている。

６０年代末から８０年代初頭にかけて、東南アジア大陸部の民族誌的調査研究は、タイ一国を除き広範囲に実施されることは困難であった。民族、社会・文化の研究は主にタイを舞台としてなされ、東南アジア大陸部の民族誌的研究には大きな空白が生まれることになった。しかし、８０年代に入り制限つきであるにせよ、これまで入国さえ不可能であった地域において、さまざまな分野での経験的研究が可能となった。この間に遂行された調査研究のなかで共有されつつある認識のひとつは、前述したように、個別の村落、民族、地域社会を捉えるためには、観察者側の恣意的に切りとられた範囲に完結することなく、個々の語りや表象を、国家間、民族間との関係のなかで分析・検討しなければならないというものである。とりわけ境界の民族社会を調査してきた研究者の間では、それは強く意識されてきた。

さらに、今日新たな国家間・地域間統合への動きがみられる東南アジア大陸部においては、

当該国の内なる異民族社会の研究もそれぞれの文脈において進められている。まなざされる「民族」についての新たな言説が、学術研究として、あるいは国家政策の一環として蓄積・流通しつつある。東南アジア大陸部の民族誌的研究をとりまく環境は、観察者と被観察者の関係のなかで、円環的かつ重層的な構造をとりながら、異国の訪問者たる研究者を包みこんでいる。こうした状況を前にして、過去十年ほどの間に激動する東南アジア大陸部の諸民族社会のただなかで現地調査に従事してきた、同世代人としての研究者の集いを現時点において重ねることは、有意義のみならず緊急に必要とされることでさえある。そこで、本研究班では以下の論点ないし課題を、さまざまな問題群を析出整理するために設定した。

（1）民族集団が帰属する、あるいは包摂される歴史的文脈の検討

過去十年ほどの間の調査研究で明らかにされた、対象地域や国家における政治・経済的、社会・文化的背景について。とくに８０年代以降の個々の民族集団をめぐる状況や文脈の構造的変化についての具体的な検討。民族集団をめぐる外部環境－国際関係・地域秩序の再編、「国境」のボーダレス化と地域経済圏の活性化、国家による開発政策の推進など－と民族間に作用する政治力学の変化、民族間の経済格差。資源をめぐる競合・対立関係等。

（2）「民族」の構築に関する理論的問題の検討

「山地民と平地民」「棲み分け・共生」「開放系と閉鎖系」など、人類学者がうみだした古典的なモデルや理論の再検討。さらに、社会主義国家に顕著な政策科学的立場から創られ定義された「民族」の各国ヴァージョンの比較。また、タイ族の起源論にあるようなさまざまな民族的主体が自ら構想する自己意識、他者意識など、共同の想念としての「民族」の検討。

（3）民族間関係の動態と力学について

相互行為状況下における「民族」の生成過程、実体論的な「民族」理解にかわる関係論的分析。「民族」をめぐるマクロ、ミクロな力、「民族」生成の社会的磁場に作用する力学の論理とマクロな作用過程、競合・対立・融合・協調。相互過程。各国の民族政策。さらに「民族」の生成をめぐる言説・イデオロギーの創出・再生産、相互認知システムの検討。「民族」の差異化・同化をうながす政治、経済、社会、宗教（儀礼祭祀をも含む）、文化的な諸力、民族的境界維持のメカニズムの検討。

（4）フィールドワークと民族誌的記述をめぐる諸問題について

今日、急速に変貌しつつある対象民族社会と研究者の関わりにおいて、記述する側が恣意的に運用してきた「民族」像、およびフィールドワークの限界と可能性、さらには国境を越えて広がる民族集団にたいする動態的な民族誌の記述の方向と実践についての検討。

民族というものが、それを想定しあう複数の民族の関係のなかで生じるとすれば、本研究の表題が含む「民族間関係」という用語は同義反復でしかない。だが、リーチの著作以後の今日もなお、民族が自立した存在のようにして記述される傾向は、減少するどころか逆に強まってさえいる。「民族間関係」を含めたのは、語られる民族は常に相互関係における現象（関数）であるという基本的事実を想起することで、構築されている社会や文化の制度編制様式（同時発生する非制度的領域のありかた）についての議論を物象化してしまうことを回避するための警句ないし慰めのようなものと理解されたい。つまりこの表題には、ある地域の人びとの社会関係について研究する者が、それを第三者（読み手）にたいして記述するときに必ず遭遇する自己矛盾を（棚上げするのではなく）問題化しようとする意志をこめている。

本報告書への寄稿者は「地域」という用語について、いささかなりとも明晰なる合意や概念を抱いていたわけではない。定義そのものをめぐって積極的に議論をしたわけでもない。しかし、ある作業仮説的な考えは共有されている。地域というものは、それが記述される際に常に書き手の優位性において区切られ与えられるもの、という認識をもって扱うべき対象であるということである。その意味では「地域」は従来扱われてきた「民族」の概念と双生児のように似ている。われわれは宗教の定義にかんするヴェーバーにしたがって、あるいは異文化の民族誌学の将来についてのギアツにならって、個々の観察者によるそれぞれの「事象」を記述検討することから出発することに合意した。素朴に過ぎるかもしれないが、見いだされる事実とそれをめぐる認識に対する「飢え」が先行したというべきであろうか。

共有されたもうひとつのことがらは、ある民族間関係とは、常に特定の場所と特定の時期に属しているというきわめてシンプルな認識である。民族と地域は、その意味でも、常にある「場」において生成し、在地性をもって見られ語られ記述される対象として研究者（異邦人）の間に漂流する概念である。これまで断片的にとりだされていた資料を取り集め、過去に記録された文書の成立過程を追求することも重要な作業となった。その通念や定義がいかにしてな

され、通用してきたのかを明らかにしておくことは、その場所と人びとに関わる当人の位置を明確にするために欠かせない。「まなざし」という言葉はそうした作業を目標とするにあたり、そこで作動する権力効果を覆い隠すようでいささか弱々しい響きをもつかもしれない。しかし過去の、あるいは現時点における複数のまなざしが、当地において現れるとともに、その外においても重層しつつある民族や地域となって像を結んでいる。スコットがみた世界と本報告書での高谷紀夫がみる世界は違う。だが、スコットの描きだしすシャン（民族）とシャン高原（地域）は、高谷自身のイメージの一部をなしてもいるのである。

割れた鏡を拾い集めてつなぎ合わせるような作業を目標としたわけではない。散らばっているようにみえるさまざまな立場におけるそのまなざしを、まずは可能なかぎりそれぞれの領野で拾い上げようというのである。隣接しつつも異なるシステムをもつ地域、国家で同じ民族名を語る人びとと遭遇した経験をもつ者は、そうしなければ民族という現象がとうてい理解しえないような状況におかれるからであろう。その場に身をおくことである民族についての一枚の絵が脳裏にできあがる。だが、それが自身の常識的理解に過ぎぬものであることを別の地の同じ民族が教え諭してくれるという終わりのない循環に陥り、対面しているのは民族ではなく、ある集落のある一人の人間であるという認識に至る。しかし同時に、隣人や同じ民族からも自らを差異化して「われわれは○○だ」といわしめる力の所在と過程にも目がむき始める。その人が身をおく現実は、国家がくりだすステートメントやさまざまなイデオロギーの断片の単なる寄せ集めなどではない。それぞれに生きられる地域を確かに創っているのである。

2

以下のそれぞれの報告論文が対象とする人びとは、シャン、ラオ、タイ・ヌー、タイ・ルーである。いずれもタイ系諸族である。タイ系諸族とはタイ系の言語を話す人びとの総称である。「現在のタイ王国のみならず、西南中国、ラオス、ベトナム北部、ビルマ、アッサムに広く居住する人びとである」と今日記述されるようになった人びとである。東南アジア大陸部の（今日と過去の）地域性をみる際にビルマ族、ヴィエト族とともに欠かせない人びとのことである。

高谷紀夫「『シャン』世界とその脈絡」は、現地調査にむけての予備考察であるが、本研究会の根本的な趣旨に沿う問題を扱っている。ビルマにおける諸民族の動態を考察するために、既存および現在蒐集中の資料を参照することにより、可能な視点の探索と今後の課題を示そう

としたものである。そして「他者とのかかわり」という視点とその名で呼ばれる人びとの側からの資料の必要を強調する。従来記述されてきた「シャン」をめぐる表現の用例を対象に、「シャン」という広汎に使用されている呼称がビルマ人による他称であり、そしてビルマを植民地化した英国側に用いられてきたことを明らかにしつつ、民族名称の考察が誰がいかなる脈絡において使ったかということを抜きにしては民族の名称を考察できないとする。さらに、ビルマあるいはその周辺で「シャン」がどのような意味を負い、あるいは負わされてきたのか、「シャン」と「非シャン」とを区別するもの何か、さらに「シャン」内部に区分の由縁はないのかを問うている。歴史記述では「シャン」とは「ソーボアの治める土地」として描かれる一方、シャンと呼ばれる人びとからの見方や自己認識については記さない。リーチ（1954）では「グムラオになる」「シャンになる」というカチン人の言説を軸とするように、「シャン」と「カチン」は関係のなかで捉えられた。リーチ以降、ビルマ国内の調査制限からタイはメーホンソーン県の「シャン」あるいは「タイ・ヤイ」が対象とされているが、それらにおいても山地民との世界観の連続性が問題にされた。人類学的記述においても「シャン」は他者との関わりにおいて認知される。さらに、政府が公表するセンサスでも、政府が認知する用語としての「民族」の脈絡は、常に連邦制の維持、団結協力を前提としており、すべてが他者からの認知例としての性格をもつことが指摘される。仮に「シャン文化圏」というものがあるならば、何らかの共通意識がシャン高原で生きる人びとの間に存在するのならば、いかなる意識がどのようにして形成され変容してきたのかが考察されなくてはならない。「シャン」について上座仏教、水稲耕作が共通の要素として指摘されるが、それでは周辺のビルマ文化などとの相違点は不明瞭となる。その意味で「シャン高原」というフィールドの特質が検討されるべきであるとしている。

林　行夫「ラオ人社会をめぐる民族・国家・地域」もタイ系諸族の「ラオ」が使用されきた背景を、同じタイ系民族が建設する二つの国家間関係と一地域における非タイ系民族との関係において問う。そこでは、前世紀末よりメコン川を隔てて二つの国家に分かれ住むことになったラオ人の重層的なアイデンティティ形成の経緯が描かれる。かつてはタイを自称してきた人びとが国家間の関係のなかで「ラオ」となり、分断されたラオはそれぞれの国家と地域で生活世界を編制してきた。フランス植民地政府によりラオを国家名称としたラオスでは、後の内戦から社会主義体制への経験を軸に、タイ国が与えてきた政治・文化的従属者ではなく多民族国

家を造る同胞の総称へとラオを表象してきたが、それはタイ東北地方のラオから自己を差異化する過程でもあった。他方、植民地化、社会主義国への転成を対岸にみた東北タイでは、国策の一環としてとられた脱ラオ化政策により地域アイデンティティの「イサーン」が生成した。ラオの生成と変質は国家間関係のなかで生じてきたという一面をもつ。しかし、隣人関係が織りなす地域としての東北タイでは、非タイ系の周辺民族のまなざしにおいて今日もラオが相互を差異化する指標として生きている。それは中央の政府や知識人、メディアの操作者が隠示的に含意し続けるラオ像とは異なっている。そして東北タイの非タイ系民族によるラオの了解論、遭遇過程、コメ品種交換に注目しつつ、東北タイでラオが彼らといかなる関係をとり結んできたのかが記述される。中央からの権力作用にたいして主要な受け皿となる東北タイのラオが今日イサーンを名乗る背景には、後発の移住者として行った「半商人的」な開田移住や行商活動がある。それらは非タイ系の人びとに経済的優位者としてのラオを印象づける一方、国家の周縁におかれたラオの拡散的なアイデンティティのあり方をも生みだしている。タイ国籍を受け統合されたかにみえる東北地方は、隣接する民族相互の関係が多元的かつ累積的に編制する地域を内蔵しつつ生成しており、国家のまなざしを相対化する現実を展開させている。

長谷川清「上座仏教圏における『地域』と『民族』の位相－中国雲南省、徳宏タイ族の事例から」は、中国西南部は徳宏タイ族の事例を扱いつつ、１９８０年代以降の宗教政策とのかかわりで、仏教再生の意味を再検討することを目的としている。上座仏教と国家統合の問題を機軸にすえながらも、横軸として民族間関係、地方サンガの歴史的動態、あるいは交流状況をも明らかにしてゆくという試みである。上座仏教を信奉する集団が既存の国家体系においていずれもドミナントな体制となっているわけではない。徳宏タイ族のように、中国において政治勢力としては周縁的な立場にあり、国家にたいして従属的な状況下におかれているケースでは、従来議論されてきた上座仏教圏における国家統合の主要な体制原理や国家イデオロギーに直線的に連携するのではなく、エスニックな問題領域を構成する要素としてむしろ「国民国家」を相対化する原理にもなりうるという視点が必要である。シャンの上座仏教はビルマのシャン州、中国雲南省、タイ北部に広がりをもつ。タイ北部のシャン寺院では、ケントゥン地区のサンガとの交流が認められる。徳宏地区の事例もその仏教文化の系統、起源がビルマのシャン州にあることを雄弁に物語り、大躍進や文化大革命のような政治・社会的混乱期においてもその交流が保持されてきた。国民国家内部で進行する「サンガの一元化」という過程の背後には、あい

かわらず国家や民族、地域間を越えたサンガの交流関係が維持されている。上座仏教は、一国の政治、文化的統合を促す接着剤として作用すると同時に、地域間の交流をはかる機能を併せ持つ点を見落とすことはできない。長谷川はこの横軸こそが「地域」を生成する力学でもあるという。この視点にたつことで、雲南、東南アジア大陸部における民族間関係の動態、例えばシャンがビルマ仏教の影響を強くうけつつも、近代以降の歴史のなかでは対立的局面が顕著になっていくというような現象が、より立体的かつ内在的に理解できるのではないかとしている。

馬場雄司「タイ・ルーの移住と精霊祭祀［概況］－北タイを中心に」は、精霊祭祀そのものの在り方と、儀礼に現れる伝承や再現される移住史に着目しながら、中国西双版納から北タイに移り住んだタイ・ルーをめぐる国家と地域、民族の動態をよみとこうとしている。北タイのタイ・ルー社会で実践される精霊祭祀では、文書や伝承のかたちで往時の移住の経緯が表現される。それらの資料は、往時の移住の実態を復元するばかりではなく、彼らの歴史「意識」をも明らかにする可能性をもつ。馬場は、パヤオ、チェンラーイ、ナーン、ランパーン、チェンマイにおけるタイ・ルー村落の概況を紹介しつつ、儀礼の変容、移住に関する文書および口頭伝承の内容を詳細に記述することによって、西双版納、タイ北部、ラオスにまたがるタイ・ルーの集落の系譜と分布を明らかにしている。また、前世紀において、北タイを中心とする地方土侯は、移住したさまざまな出自のタイ系諸族と関係をもったが、ルーは同一地域に居住することになった他のタイ系諸族間で使用された、出自を示す（西双版納を故地とする）呼称としての可能性が高いことをも示唆する。タイ・ルーの人びとは国境画定、地方土侯の廃絶を経て、タイの国民国家が形成されるなかでタイ国民として一元化されてきた経緯をもつが、現在では観光化、村おこしなどでタイ・ルーを前面にだしている。その動きは、前世紀から連続する地域レベルでの差異化の体系に基づいての主張である。馬場が注目するもうひとつの現象は、農村開発の進展によって変容するタイ・ルー社会と精霊祭祀のイベント化と、それらをとりまくさらに大きな変化、すなわち、近年の冷戦構造の崩壊に伴って盛んになってきた、中国、ビルマ、ラオス、タイの４か国による国境地域（メコン川流域）の共同開発の動きである。現在進行中の国境横断道路建設の計画などは、タイ・ルーの分布地域における織物などの観光への利用をさらに刺激するものであり、新たに形成される「地域」のなかで、タイ・ルーをはじめとする民族は運命をともにしようとしている。同時に、急速な開発がもたらす環境破壊の脅威についてもその現況が報告されている。

本報告書で記述されている人びとは、書き手自身を含む「他者」とのかかわりのなかで認知されている。それは、人びとが居住ないし移動する範囲を外部から輪郭づけうるような「場」を顕現させる作用をもっている。その「場」は、人びとの動きと国家政体の権力作用によってさらに錯綜した姿を形成しつづける。まなざす行為もまなざされる事象もそれを外部からみる複数の他者という環境のベルトが重層するなかで起きる。いくつかの報告でも示唆されているように、民族呼称の基本型が集落が結ばれる「場」ないし地域（生態環境、前近代国家）にまつわるものであるとすれば、東南アジア大陸部では先住民社会においても競合する隣人関係から生じる優勢な他者、そして仏教王権、国家装置をもつビルマやタイが現れる後では、自己を定位づけるアクセントがそのような「対地関係」から「対『民族』関係」へと重心を移している。それらはいずれも在地性を伴うコミュニケーションの様式であると同時に、階梯的秩序において相互を認知する様式である。冷戦構造が崩壊し「国民国家」が表出する現在、多元化する「対『民族』／国家関係」のなかで「対地関係」が装いを新たに表われている。国境を越え、それぞれの隣人とともにくらしを営む人びとを訪れてみえてくるものはそうしたことである。

本報告書に収録した論考がそれぞれに描く「人」と「場」をめぐる関係の諸相は、予定された終結にむけてなされたものではない。個々人がもつ資料の断片をとりだし、議論を通じて広げつつとりまとめ、個々人が抱かれているそれぞれのフィールドでの「足場」を呈示している。したがって、この成果報告は与えられた研究の終了を告げるものではなく、他者のなかの民族、自己のなかの異文化、そして「われわれ」がよってたつ地域の多元的現実についての理解を深めるための出発点を見いだそうと試みた。そこへと至る機会が与えられたことに感謝しつつ。

（文責：林　行夫／高谷紀夫／長谷川清）

文献

Geertz, Clifford
1988 Works and Lives: The Anthropologist as Author, Stanford: Stanford University Press.
Kunstadter, Peter (ed)
1967 Southeast Asian Tribes, Minorities, and Nations (2vols), Princeton: Princeton University Press.
Leach, Edmund R.
1954 Political Systems of Highland Burma, London: London School of Economics and Political Science (関本照夫訳『高地ビルマの政治体系』弘文堂 1987).
Moerman, Michael
1965 "Ethnic Identification in a Complex Civilization: Who are the Lue?," American Anthropologist 67: 1215-1230.
Weber, Max
1963 (1976) The Sociology of Religon (trans. by Frank H. Knight), Boston. (武藤一雄ほか訳『宗教社会学』創文社 1976).
大林太良 (編)
1984 『東南アジアの民族と歴史』山川出版社
Scott, Sir J. George and J.P. Hardiman
1900-1 Gazetteer of Upper Burma and the Shan States, Part 1 (2 vols) and Part 2 (3 vols), Rangoon[reprinted by AMS].

【付表】研究活動

第1回研究会 (95.10.7-8／於広島市)
「無文字社会の『歴史』と『社会』へのアプローチーミャオ (Miao) 族／モン (Hmong) 族の調査から」谷口裕久 (京都文教大学)
「中国史の中の苗族ー『苗』をめぐる諸言説」武内房司 (学習院大学)
「コンバウン朝前期の『民族』の認識」渡辺佳成 (岡山大学)
第2回研究会 (95.12.26-27／於岐阜市)
「ミエン・ヤオ族の移住とエスニシティ」吉野晃 (東京学芸大学)
「南タイの村落における実践宗教ーケークレ (ムスリム) とタイ (仏教徒)」西井涼子 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)
「総合討論」
第3回研究会 (96.3.3／於京都市／坪内班との合同研究会主題『東南アジアの民族と複合性』)
「北タイ・カレン族における『民族』と『文化』の再考ー仏教化の事例から」速水洋子 (東北大学)
「『シャン文化』と地域性」高谷紀夫 (広島大学)
「スールーにおける民族形成と地域システム」床呂侑哉 (東京大学)
「"Glocalization" ー地域性と民族複合性の形成論理」山下晋司 (東京大学)

第４回研究会（96.3.4／於京都市）

「民謡によって表現される『地域』－民謡研究の相対化をめざして」川村清志（京都大学）

「貴州ミャオ族の民族文化と『現代化』－国民統合とエスニシティの在り方をめぐって」巣曽　士才（法政大学）

第５回研究会（96.3.16／於大阪市）

「パガン朝時代のビルマの仏教」田中和（大阪外国語大学）

１９９６年度に入ってからは、次の研究会が実施されている。

第６回研究会（96.4.19／於京都市）

「雲南における民族間関係と生態系」劉 剛（雲南民族学院民族研究所）

第７回研究会（96.7.12／於京都市）

「東北タイの治療師モーラム・ピーファー－天上霊信仰とその継承」加藤真理子（コンケーン大学）

「ベトナム中部高原少数民族と周辺地域」中田友子（民博総研大）

「守護霊祭祀と『歴史』の記憶－中国徳宏地区タイ・マオの事例から」長谷川清（岐阜教育大学）

「総合討論」

第８回研究会（96.12.20／於京都市）

「北タイ・シャン社会における民族間関係と宗教」村上忠良（筑波大学）

「ビルマ辺境における多民族社会の動態」吉田敏浩（Asia Press International）

なお、今年（１９９６年）度内にあと二回の研究会が予定されている。